

# 文化モデルと日本事情教育

徳井厚子

- 1 本研究の目的と位置づけ
- 2 文化モデル構築の試み
  - 2-1 日本事情とは何か
  - 2-2 田中, 秦「文化理解の階層的モデル」
  - 2-3 Bennett の文化モデル
  - 2-4 Dodd の文化モデル
- 3 日本事情教育のための文化モデル構築の試み
  - 3-1 文化モデルと日本事情教育—culture specific の立場から—
  - 3-2 日本事情を学ぶとは
- 4 実践報告: 「日本事情を学ぶこと」を考える—internalization と externalization の観点から—
- 5 終わりに

## 1 本研究の目的と位置づけ

日本事情はいったい何を、どのように教えたらよいか、という議論が最近よくなされている。「どのように」教えたか、つまり実践報告についてはいくつかなされているが、領域、意義などについてはまだ混沌としているのが現状ではないかと言える。この分野がまだ新しいことも理由の一つであるといえるが、日本事情そのものが様々な領域と関わりをもっていることも理由としてあげられる。

筆者の所属する大学においても日本事情を大きく分けて 1) 日本語日本事情教官単独による講義、ディスカッション、トレーニング形式のもの(現代日本社会、文化、伝統文化、異文化コミュニケーション等) 2) 専門教官によるリレー講義形式のもの(社会系、及び自然系) 3) 留学生の他に日本人学生、帰国生等をも含めた多文化クラスでの発表、討論形式のもの3種類の形態の日本事情教育を行っている。1), 2) は留学生のみを対象としている。(第4章で詳述) それぞれ、人文科学、社会科学や自然科学の諸領域と関わりを持っているということが言える。日本事情は幅広い分野と関わりをもちながら発展していく可能性を備えている分野であると言えよう。しかし、様々な方向に広がっていく可能性を秘めつつも、同時にその根底にある種の共通した文化モデルを考えることが可能ではないかと考えた。

本稿では、これまでに異文化コミュニケーションの分野においてつくられてきた幾つかのモデルを考察し、それらが日本事情教育を考える文化モデルの作成のために有効であることを示し、それらをもとに文化モデルの構築を試みるものである。モデルが日本事情教育の全体を網羅することは不可能かもしれないが、提示するモデルが日本事情を学んでいく一つの

手がかりとなるのではないかと考えている。なお、本稿における文化モデルは、これまで異文化間コミュニケーションの分野で用いられてきたモデルを参考に、まず culture general という点からいわゆる「普遍文化モデル」として考察する。次にそのモデルに基づき、culture specific な観点から、日本事情教育の実践報告を行ない、「日本事情を学ぶとは何か」について考える。

## 2 文化モデル構築の試み

### 2-1 日本事情とは何か

砂川(1995)は、日本事情の対象領域について、「多様であるが、個別的専門的対象性の位相、常識的通念的対象性の位相、日常的教養的対象性の位相に分けられる」としている。また、細川(1994)は日本事情の役割について「日常的な視点からの個別現象をてがかりにすることによって、日常生活で垣間みた日本の社会、文化等の諸現象について自らの体験やそれぞれの社会・文化との比較を通して日本とは何かを考えさせること」としている。筆者の担当している日本事情も砂川の述べるように形態も他分野との関わり方も様々であり、またいずれのタイプの日本事情も細川の述べるように日常的な視点からの個別現象を手がかりとしている。筆者は文化を「人間の生き方(態度)、考え方(価値観、信念)、及びそれらを取りまく環境(社会システムや文化的背景)」と捉えた上で、日本事情教育について次のように定義する。

異文化接触等身近な体験や出来事を出発点とし、人間の生き方(態度)、考え方(価値観、信念)、及びそれらを取りまく環境(社会システムや文化的背景)を通して、日本(人)及び自己とは何かについて考えること。

なお、この場合、対象は留学生ばかりでなく、日本人学生や帰国生等も含むものとし、主に国内における日本事情教育を対象として考えた場合とする。

では日本事情を学ぶために手がかりとなるための「人間の生き方(態度)、考え方(価値観、信念)、及びそれらを取りまく環境(社会システムや文化的背景)」を重層構造でとらえた文化モデルを構築することは可能であろうか。様々な領域と関わりを持ち、形態も様々であり、また領域自体も曖昧である「日本事情」の文化モデルを構築することによって領域を限定してしまうという危険性も存在するであろう。しかし、モデルの構築によって、混沌としている日本事情教育を包括的にとらえる一つの手がかりができ、何を学ぶかについてのひとつの視座を提供することが可能ではないかと考える。そして、様々な領域と関わりをもっている日本事情がさらに様々な要素を含みつつ発展していく一つのきっかけとなる可能性となるのではないかと考える。

なお、「文化」をどう捉えるかは文化人類学的見方、心理学的見方によって異なっているが(注1)本論で扱う日本事情教育のための「文化モデル」は異文化間コミュニケーションの分野における文化モデルをもとに構築を試みる。

本章では、Bennet, Dodd のモデルが日本事情の文化モデルを考えるために有効であることを示し、culture in general な立場からの文化モデル構築を目指す。そして3章ではこれをもとに culture specific な立場から日本事情教育の実践報告を行ない、「日本事情を学ぶとは何か」について考察する。

### 2-2 田中, 秦「文化理解の階層的モデル」

田中・玉岡(1995)では文化の理解を(1)語義的レベル, (2)文脈的レベル, (3)社会的判断レベルに分け, 階層性が想定されることが報告されている。

田中・秦(1996)はこれを(1)(2)(3)の順に理解のレベルが上がり, 上位の理解レベルは下位の理解レベルを前提とし, 包含するものであるとし, モデル化している。(1)語義的理解には文化特殊語彙等の基本概念が含まれ, (2)文脈的理解には前後関係, 適用の幅, 例外, 表出方法の微調整等, 対人関係場面での表出が含まれ, (3)社会的理解では社会的価値観, 異文化葛藤, 結果の予測と対応の準備, 社会的成熟等の価値判断を含むものとしている。

このモデルは「異文化適応教育」と「語学教育」との関わりに特に重点をおいて作られたものであるといえる。この両分野と深い関わりをもつ日本事情教育にとっても「どのように学ぶか」を考えていく上のモデルとして重要な意味をもつと思われる。特にコミュニケーションと関連させた形で教授法を考えていく際, このモデルはかなり有効であろう。

しかしながら, 日本事情教育の場合, 異文化理解教育以外の様々な分野とも関わりを持っている。筆者はさらに「日本事情で何を教えるか」を考えるための手がかりとして, さらに幅広い範囲をも包括した視座からの文化モデルが必要ではないかと考えている。

### 2-3 Bennett の文化モデル

Bennett は文化について「異文化コミュニケーションの分野で取り扱う際には, 交流のある人々のグループで共有している価値観, 信念, 行動を指す」(1992)と定義している。

Stewart & Bennett(1992)は文化を Objective culture, Subjective culture に分け, 次のように定義している。

Objective culture is the institutions and artifacts of a culture, such as its economic system, social customs, political structures and processes, arts, crafts and literature.

Subjective culture is the physiological features of culture, including assumptions, values, and patterns of thinking.

Bennettはこの分類をもとに文化を Big C Culture(CULTURE と示す)と Small c culture (culture と示す)に分け, 次のように図式化している。

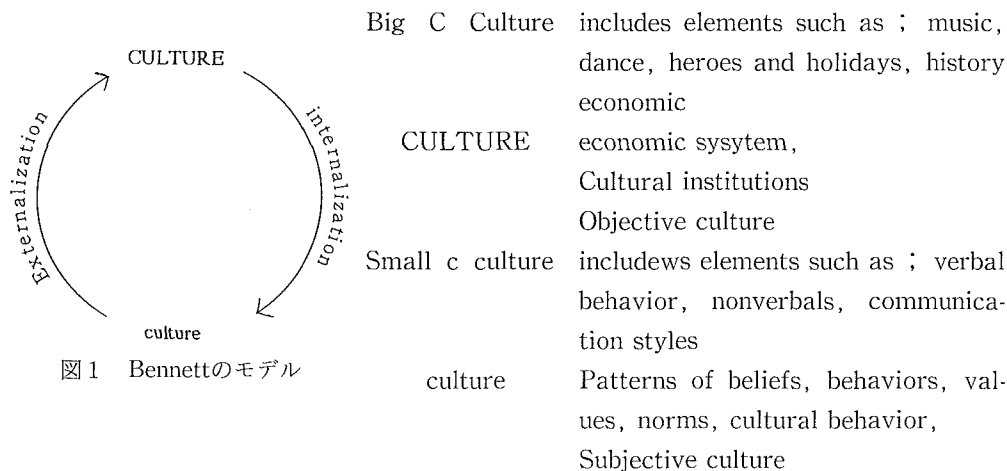


図1 Bennettのモデル

Bennettはこのように文化を経済システムや音楽、歴史などのObjectiveなものを指すCULTUREと行動、信念、価値観、コミュニケーションスタイルなどSubjectiveなものをさすcultureとに分けている。これはEdward Hallの定義するovert cultureとcovert cultureの区分にほぼ対応していると言えよう。(注2)

さらにCULTUREからcultureへの過程をinternalization(内在化:訳 筆者)の過程とし、cultureからCULTUREへの過程をexternalization(外在化:同)の過程と捉えた。つまりこの2つは別個に存在するのではなく、内在化、外在化させながら相互に影響を与えているものであるとされる。Bennettによれば、language(言語)はこの2つの文化の橋渡しとして存在するものだという。

#### 2-4 Doddの文化モデル

Dodd(1994)は文化を次のように定義している。

Culture is a holistic summation and interrelationship of an identifiable groups beliefs, norms, activities, institutions and communication patterns.

(文化とは同一のグループの持つ信念、規範、活動、制度、コミュニケーションパターンの集まり全体とそれらの相互関係を指す)(訳:筆者)

Doddは文化が人間に及ぼす基本的な影響として以下の3点をあげている。

- 1) 文化は規則、儀式やその方法などのアジェンダを提供する。
- 2) 文化は善悪の価値観を強化し、信念を伝える。
- 3) 文化はわれわれがどのように結びつき、どのようにコミュニケーションするのかを教示する。

さらに、文化を人と人を結びつける「糊」のようなものであり、われわれがいつも持ち運びできる「荷物」のようなものと比喩している。

Doddは以上のように「文化」の概念を述べた上で図2のように文化を構成する要素をモ

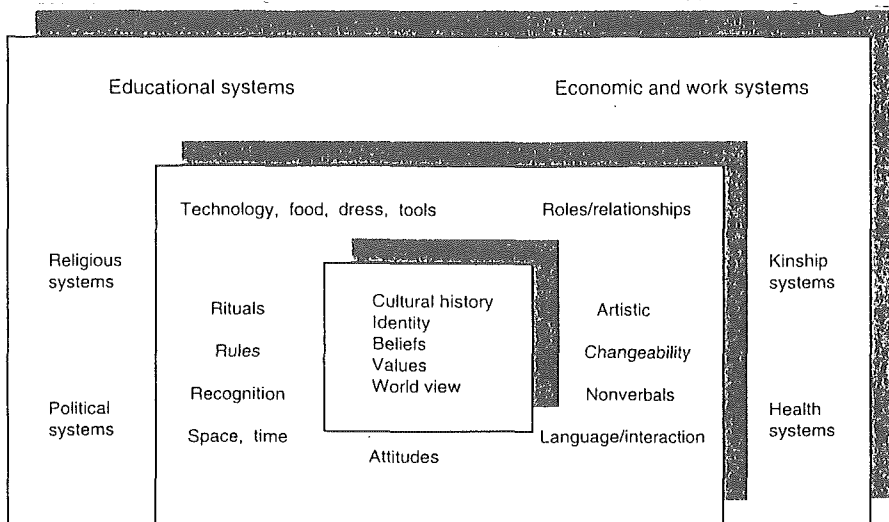


図2 Doddの文化モデル

デル化している。

Dodd は一番中央のコア (the inner core) は最も重要なレベルであり、2 番目及び 3 番目のレベルは中央のコアと結びついている、と補足している。

Dodd のモデルによれば、中央のコア (核) にはアイデンティティー、信念、価値、世界観が位置づけられ、2 番目のレベルには規則、認知、時間、空間、態度、役割、人間関係、ノンバーバル、言語が位置づけられ、3 番目のレベルとしては教育システム、政治システム、経済システムなどが位置づけられるとしている。

さらに Dodd は文化をシステムとして捉えた場合、Becver and Becver 1982 によってあげられた文化のシステムとその要素についての特徴を指摘している。

- 1 それぞれの要素は互いに相互に影響を及ぼし合っている。
- 2 それぞれの部分は全体に影響を及ぼしている。
- 3 一つの文化と他の文化を区別させる境界線を提供している。
- 4 コミュニケーションの原因と結果を生み出す。コミュニケーションのパターンと文化は切り放せない関係に有る。
- 5 文化の要素がバランスを欠いたり機能しなかった際には自己モニターのフィードバックが行われる。
- 6 このシステムは open の場合と closed の場合が有る。

以上、Bennett と Dodd の文化モデルを紹介した。Bennett の定義する culture は Dodd のモデルにおける一番中央のコアと類似しており、CULTURE は Dodd の 3 番目のコアに類似しているといえよう。Dodd は文化システムを重層的なモデルで示し、Bennett は循環の形で示しているが、基本的な考え方においてはこの両者に共通点が多いのではないかと考える。3 章ではこの 2 つの文化モデルを参考にし、日本事情教育のための文化モデルの構築を試みる。

### 3 日本事情教育のための文化モデル構築の試み

ここではまず、前節で紹介したモデルを参考に cultural in general の立場から文化モデル構築を試み、次にそれをもとに日本事情を学ぶこととは何かについて考える。

#### 3-1 文化モデルと日本事情教育—culture specific の立場から—

筆者は本稿において文化を「人間の生き方 (態度など)、考え方 (価値観、信念など)、及びそれらを取りまく環境 (社会システムや文化的背景等)」と定義した。日本事情で取り扱う範囲をこのようにとらえ、これらの要素をモデル化するとどのようになるだろうか。

「人間の考え方」は価値観、信念など、いわゆる人間内部の心の状態であり、目に見えない部分である。これは外部の影響を受けにくい部分である。Dodd の文化モデルにおける一番中心のコアの領域と類似しているといえよう。また、Bennett は small culture の領域に patterns of beliefs, values を含めているが、この部分は small culture の一部であると言ってよいであろう。

「人間の生き方」は対人関係、態度、行動 (言語・非言語行動も含む) 規範、習慣などである。これは人間内部ではなく、人間の外部に現れるものであり、音、動作などの媒介をと

おして知覚できるもの（目にみえるもの）もあるが、概念、規範、習慣のように目に見えないものもある。Dodd の文化モデルにおける 2 番目のレベルと共通する部分が多いといえる。Bennett は small culture の一部に nonverbal, communication styles, cultural behavior を含めているが、この部分が相当するであろう。

「人間をとりまく環境」は社会システムや文化遺産、など広い領域にまたがっている。社会制度など、直接目に見えないものもあるが、芸術作品、文化遺産など、目に見えるものもある。Dodd の文化モデルにおける 3 番目のレベルと共通する部分が多いといえるであろう。また、Bennett の BIG CULTURE はこの部分と共通点が大きいだらう。

これらは相互に関連しつつ、「人間の考え方」を深層（核）とする重層構造をなしていると言える。

まず、価値観、信念などの「人間の考え方」すなわち最も外部の影響を受けにくい一番中心のコアの部分（深層部分）は中央部分に位置づけられる。そして 2 番目のレベルとして対人関係や態度、（言語・非言語）行動などの「人間の生き方」が位置づけられる。そして 3 番目のレベルに社会システムや文化遺産などの「人間をとりまく環境」すなわち外部の影響を最も受けやすい表層部分が位置づけられる。なお、この 3 つの部分は明確な境界線があるというよりはむしろ重層的に連続していると考える。

では具体的に日本事情教育のあり方をこのモデルを応用し説明するとどうなるであろうか。次章では culture specific な立場から特に日本事情「教育」に焦点を移して論じたい。

### 3-2 日本事情を学ぶとは—internalization と externalization—

前章では culture general の立場からのモデル構築を試みた。では具体的に「日本事情を学ぶ」とは何だろうか。

2 章で筆者は日本事情教育を

異文化接触等身近な体験や出来事を出発点とし、人間の生き方（態度）、考え方（価値観、信念）、及びそれらを取りまく環境（社会システムや文化的背景）を通して、日本（人）及び自己とは何かについて考えること

と定義した。では「考えること」を具体的にモデルを用いて説明するとどうなるであろうか。

まず、日本事情教育を specific な立場ではなく general な立場から、前章で示したモデルをもとに考えてみたい。

まず、我々の日常生活において身近で目に見えやすいものには我々を取りまいている環境であろう。日常で起きる様々な出来事、事象や、建築、芸術作品、文化遺産などは目に見えやすいものである。これらに接し、それがどのような考えのもとで生まれたのか、生き方、考え方がどのように反映されているのか深層部分へと探求していく方向性が必要であろう。すなわち、3 番目のレベルから中心すなわち 1 番目のコアのレベルへ向かう方向である。つまり Bennett の述べる BIG CULTURE から small culture への internalization（内在化）の方向性であるといえる。

それと同時に逆に人々の様々な考え方に接し、それらの背景にはどのような生き方、環境があるのかと周辺部分へと広げ探求していく方向性も必要ではないかと考える。すなわち、中心のコアから 2 番目、3 番目のレベルに向かう方向である。Bennett の述べる small cul-

ture から BIG CULTURE へを externalization（外在化）の方向性であるといえる。

筆者は日本事情教育の役割を考える場合、このように表層から深層へと探求していく方向性と、深層から表層へと探求していく方向性を養うことが必要ではないかと考える。つまり、internalization（内在化）と externalization（外在化）の双方向性が必要ではないかと言える。方向は一方向ではなく、様々な方向が必要であると考えられる。

以上 3-1, 3-2 で述べた日本事情教育のための文化モデルは図 3 のようになる。

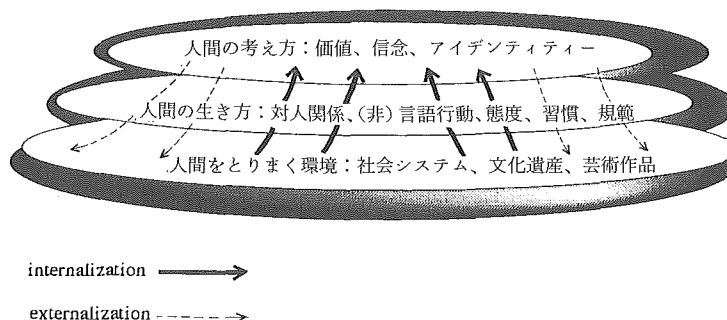


図 3 日本事情教育のための文化モデル（徳井）

一番上のレベルは中心のコアであり、下のレベルにいくにつれ、2 番目、3 番目のレベルとなる。それぞれのレベルは重層的に連続していると考えられる。

#### 4 実践報告：「日本事情を学ぶこと」を考える —internalization と externalization の観点から—

前節では、日本事情教育を学ぶために internalization と externalization の双方向性が必要であることについて culture general な立場から論じた。ここでは culture specific な立場から「日本」について焦点を移し、幾つかの実践例をもとにこの二つの方向性から「日本事情を学ぶ」ということについて考える。

筆者の所属する大学において日本事情は大きく分けて 1) 日本事情（社会と人間基礎及び応用）2) 日本事情（日本の文化）3) 日本事情ゼミナールに分けられる。

以下ではそれぞれの授業の概要を報告し、Internalization と Externalization の観点から「日本事情を学ぶこと」とは何かについて考えたい。

##### 1) 日本事情（社会と人間・基礎）前期（社会と人間・応用）後期対象 留学生

いわゆる社会系の専門との橋渡しのコースである。主な概要は以下の通りである。

##### 社会と人間・基礎

これは社会科学の基礎および社会系の基礎のために設けられたコースであり、筆者が担当している。これは現代社会にスポットがかけられているが、知識偏重の方法でなく、自分自身で身近な出来事に問題意識を持ち、社会の出来事を観察、分析することのできる能力を身につけることを目的としている。

身近な日常生活の問題をとりあげ、そこから実際に日本社会でおきている社会問題や日本の社会システムに関する基礎的な事柄等へ広げている。

##### 社会と人間・応用

これは社会系専門教官によるリレー式の授業で、講義、ディスカッションが主である。7人前後の社会系の教官に1～2コマを担当していただいている。授業で扱うテーマは時事的な話題となっているもの等、身近な事柄が多いが、それらを題材に専門基礎語彙等を分かりやすく解説しながら専門分野へ掘り下げていくという形で授業を行っている。例えば、95年度の経済の授業では当時よく話題になっていた住専の問題、96年度の政治の授業では選挙制度の改革が行われた直後だったため、選挙について取り上げていただいた。また、この他に「結婚は契約か」「悪徳商法」「権利の乱用について」等、身近な例をだしながらテーマに行っていたものもある。95年度の授業は戦後50年であったため、「戦後50年」をテーマに政治、法律、国際関係、歴史、経済、スポーツ社会、教育の立場から授業を行った。(徳井1996c)

### ケース1 環境問題について一日常のゴミ問題から日本人の生き方、社会問題へー

日本事情(社会と人間・基礎編)から

①まず、身近な日常生活の中で環境問題と最も関わっている「ゴミ」について取り上げた。具体的にはまず、松本市のゴミの分別のしかた(ゴミ袋に氏名を書く、プラスチックと燃えるゴミは分けるなど)が書かれたちらしを資料として配り、「なぜこのように分別をおこなっているのか」を考えた。

②次に、具体的に日本でおきているゴミ問題、とその原因(現代日本人の生き方)、社会的問題(公害など)にひろげ、「ゴミ処理場がもうすぐパンク状態」「都市における埋め立てゴミ」、「水俣病」「四日市ぜんそく」についての資料読解、ビデオ視聴を行った。

③最後に身近な問題に戻り、「もしも市長だったらどのようなゴミ対策をとるか」というグループディスカッションを行った。

(1) まず身近なゴミ問題を取り上げた理由は、環境問題をそのまま取り上げるのではなく、日常生活の中でみられる身近なゴミ問題という事象からその原因を考えていく過程で、「環境問題」とむすびつけることを目的としているためである。

(2) 身近で無意識な日常生活の行為から出発して、その原因を考えていく過程で日本でおきている様々な環境問題にふれ、また現代の個人主義的になりつつある日本人の生き方、考え方とゴミに対する無責任さの関連について考える。

すなわち、これらの学びかたには日常から社会システムへひろげる方向(1)と、日本人の生き方という internalization の方向(2)があるといえるだろう。

公害病等現在おこっている問題について取り上げる。

### ケース2 権利と義務一法概念から日常生活へー

「法とは何か」、「権利の乱用とは何か」について法律の基礎的な概念、知識についての専門教官の講義を行っていただき、後に感想レポートを提出した。(注3)

権利、義務は法律の基礎概念である。担当の先生はこれらなるべく身近な例(隣の家との壁をめぐるトラブルなど)をだしながら、説明してくださった。つまり講義の中で日常生活の例をだしながら、権利、義務と言う概念に内在化させていくということによってわかりやすい説明を試みてくださった。こういった概念を「理解」していく過程で、この内在化させたこれらの概念を、今度は学生が自分自身の中で日常生活のケースへ外在化させていくことのできる力をもつことは重要であろう。次にあげるのはある学生のレポートである。



11月17日。日差しが朝早く窓からさしこんできた。よい一日になりそうと私は思ってたささと服をきて外に出た。意外に風が強くふいていた。10時から国際交流会館のみなさんが会館の回りで風にふかれて話し合いながら草刈りに熱中していた。

「国民は法のもとで皆平等である」「国民のひとりひとりが法律の下では自由。選挙するのと選挙される権利、平等の権利を享有すると共に労働と教育の義務もある」と憲法にはっきりと書いてある。

国際交流会館にすんでいて別に草刈りをしなくても法律には違反していないが、ただ、私達は外国人留学生として日本人学生が享有しない権利を持ち、会館にすむことになったのです。ただに近いお金で会館に住めることに自分達の住環境をきれいにするのは誰でも当たり前のことだと思うでしょう。

憲法による国民に与えてくれる権利は国民の自由と民主を守ってくれる。かと言ってその「自由」を限りなく使ってはいけない。権利と義務は必ず双子のように共存する。義務も私たちの「自由・民主」を守ってくれるのではないかと思います。(中国)

この学生は「権利と義務」を、単なる知識として学んだのではなく、さらにレポートの中で「草刈り」という身近な日常生活の出来事に結びつけ、「権利と義務」という抽象的な法の概念を目にみえる日常生活の出来事に外在化させている。

### ケース3 歌をとおして日本人の心を学ぶ—歌詞の意味から社会的背景へ—

日本事情（社会と人間・応用編）より

日本人が幼い頃から歌ってきた馴染みの深い歌（ふるさと、夕焼けこやけ、赤とんぼ、蛍の光、五木の子守歌など）を例に、歌詞の意味、当時の社会的背景や心情を解説していただいた。(注4)

例えば、「赤とんぼ」の場合、次のような解説を行なって頂いた。

\*「山の畑の桑の実を小かごにつんだは幻か」 桑の葉は蚕の餌である。当時の日本では養蚕がさかんであり、製糸業が日本を支えていた。信州においてもさかんであった。

\*「十五でねえやは嫁に行きお里の便りも絶え果てた。」ねえやとはお手伝いさんのこと。当時貧しい家では十二、三才の女子が他家の子守や手伝いにだされていた。

この例は歌の歌詞という「ことば」から出発し、その背景となる社会システムへ発展させるという externalization (外在化) の方向性を持っている。単に歌詞の意味の解釈にとどまるのではなく、背景へとひろげていく過程で様々な歴史的、社会的背景について学び、身近な生活と関連性を持たせていることができる。以下は学生のレポートである。

a 赤とんぼ、仰げば尊し、夕焼けこやけ、お正月などの曲は聞いた事がある気がしていた。すぐできそうな夕焼けこやけもいい歌だと思った。皆が歌えるから、気持ちに合うとき、知らず知らず歌い出すだろう。今お寺の鐘の音も昔のようにしているけど、どうしてあまり聞かないのだろうか。たぶん車の音など大きいから、あるいは皆忙しくて落ちつかないからだろう。印象に残ったのは仰げば尊しという歌である。台湾で卒業式の時、こういう歌を歌っている。同じ気持ちが現れているから、歌詞の内容も日本語と一緒に覚えている。こういう音楽を聞いて、卒業式のことを思い出した。(略) 歌でコミュニケーションできると思った。人間だから、歌や音楽を耳にして、気持ちも変わってくる。悲しい思いでも楽しい思いでは逃げられず、自然に頭に浮かんでくる。(台湾)

この学生は歌をとおして現在の社会的背景へ関連させ、自分なりに考察を加えている。

例えば、「今お寺の鐘の音も昔のようにしているけど、どうしてあまり聞こえないのだろうか。たぶん車の音など大きいから、あるいは皆忙しくて落ちつかないからだろう。」と歌詞の中にある「鐘の音」を「日常生活」の中で捉え直し、「なぜ今あまり聞こえないのか」について現在のわれわれをとりまく環境、生き方へ結びつけ、自分なりに外在化、内在化させている。また、「同じ気持ちが現れているから、歌詞の内容も日本語と一緒にある。」と述べているように歌の中に文化を超えた人間の生き方、考えかたの共通性、普遍性があることに言及している。

b (略) これらの歌を歌いながら、不思議に思うのは子どもの歌なのにとっても寂しい、悲しい雰囲気が漂っていることです。「五木の子守歌」とか、「赤とんぼ」など、正反対の階級の立場の考えをよみとることができます。「五木の子守歌」はその時代において子守の苦しみ、そして望みのない生涯を深刻に描いています。家族と離れて幼くして主人の家でいろいろ耐えながら働いていました。みんな帰省すべきお盆の時にも故郷へ帰ることはできませんでした。しかもこういう生活はいつまで続くかわかりません。悲しんでくれる人もいないはずですが。ただセミが鳴いているだけ。これは子守だけでなくその時代におけるふつうの人々の生活といってもいいでしょう。「赤とんぼ」のお嬢さんにとってはこのねえやのことはわからないでしょう。(中国)

c (略) 人間の唯一の共通点は音楽ではないかと思います。世界でその国ごとに文化が様々だから、その音楽も違うと考えます。だが、音楽は違う。うれしい時には早いテンポの音楽、悲しい時にはスローテンポの音楽、皆同じ。なぜ、誕生日は世界が同じ歌を歌うか、なぜ、歌詞もしらないポップソングを聞きながら、感じる感情が同じか、それはなぜだろうかと自分で考えたが、結論はひとつ、そもそも世界は一つであることです。外観は違うけど、心は一緒、感じるのも同じ。だから、音楽こそが世界をひとつにまとめる、一つになる、最初の一步ではないかと思います。(台湾)

bの学生は、歌詞の意味から、歌詞の中の「子守」の生き方、心情へと人間の内面にinternalizeさせている。cの学生は「歌う」という行為を通じて文化を超えた人間の共通性へと発展させている。

## 2) 日本事情 (日本の文化1・2) 前, 後期1コマ 対象 留学生

これは日本人の生き方、考え方、およびとりまく環境について、前期は主に現代文化(コミュニケーションもふくむ)、後期は伝統文化を対象を授業を行っている。

このコースは人文系との関わりの大きい科目である。テーマは学生の受講希望にあわせ、毎年少しずつ異なっているが、前期はコミュニケーションギャップとなど日常生活の身近な体験からスタートし、「その原因は何なのか」つまり背景となる人間関係、価値観、へと掘り下げていくという方法で行う。講義の他に異文化トレーニング、討論、アンケート等の形態を用いている。(徳井1996a, 1996d)

後期は伝統文化に焦点をおいているが、単に例えば年中行事等の知識の詰め込みの授業としてでなく、どのようにおこったのか、現代とのつながりはどうか、なぜなのか、といった視点から行っている。また例えば徒然草等の古典文学に見られる考え方と現代日本人の考え方に見られる共通点は何か、ということにも焦点をおいている。他に俳句の創作も行った。

(徳井1997a) 講義の他にアンケート、ディスカッション等も取り入れている。ビデオも頻

繁に使用する。

#### ケース4 伝統文化の背景にある現代人の生き方とは

##### 日本事情（伝統文化）

日本の伝統文化の授業では歴史的な背景とむすびつけながらその時代特有の様々な文化を紹介している。様々な社会システム、芸術作品、など、資料、ビデオを活用させながら行っている。方法としてはまず、例えば「冠婚葬祭」「年中行事」「寺院」「庭園」「伝統演劇」などのビデオをみせ、目に見えるもの、いわゆる Bennett の Big Culture としての文化を紹介する。これはまず視覚的なイメージを持つためである。しかし、伝統文化の紹介をこうした Big Culture のレベルの紹介にとどまらせてしまうのでは、授業はただの「日本の紹介」で終わってしまう。いわゆる「観光ガイド」とかわらないのではないかといえる。日本事情を学ぶために重要なのはその次のステップで、Big Culture から出発してそれをてがかりに日本人の生き方、考え方へと向かう internalization の方向性が大切なのではないかといえる。伝統文化の「所産」といわれている様々なものを「事実」として受けとめるだけではなく、「その背景にある日本人の考え、生き方は何か」という深層面へと追求していく力を養うことは大切ではないかと思う。このコアである深層面が時代を超えてかわりにくいものであり、現在の日本人の考え方、生き方と共通するものであることを発見していくことは重要であろう。そして、この internalization の方向へ向かう過程で現在の様々な日常的な異文化体験が重要な役割を果たしている。これはある学生のスピーチである。

（前略）「発達を続けるためには考え方をまず変えることである」とはよく知られていることです。これを頭にいれて私がこの日本にいる短い期間の間、日本人が昔からもっているような知識を学びたいです。日本人の習慣の中で「気を使うこと」は私が気にしている習慣なんです。

日本と母国ケニアの間に異なっている点がいっぱいありますが、「気を使うこと」に関するひとつの違いは自分と他人がお互いにどういうふうに考えているかのことです。

日本では人々は他人のことを気にする。例えば混んでいる電車に乗っていることを例にしましょう。暑いのに冷房はついていません。しかし、この状態でも誰も窓をあげようとしません。皆は同じ考えを持っている。自分が暑くても隣の人は寒いかもわからないので我慢します。また乗り物に乗る場合にはちゃんと列にならんであわてずに順番に乗っています。

母国ケニアは違う文化の中にありますが、乗り物といたら電車ではなく、バスです。バスにのって自分がちょっと暑かったらすぐ窓を開けます。隣の人たちが寒かったら議論やけんかであつ方法を決めるわけです。ケニア人は自分がいつも一番でいるべきだと思っているので、当然バスに乗る時も大混乱になります。列は辞書にしかない言葉で、皆の頭の中に無い言葉とよく冗談でいわれています。バスがくると足の速い人、力強い人が結局先に乗ります。ときどき窓から乗ろうとしている人もいます。（略）

こういう環境からでてきて来日したとき、どんなにびっくりしたか想像にもつかないでしょう。したがって私も私の状態にいる誰でも当然この気を使うことを影響する考え方を見習うようにがんばるにちがいない。もしかすると母国で教える機会があるかもしれません。

見習うことはいっぱいあるが、そのまま歴史を勉強しないで発展しようと思えばあっという間にとまどってしまつて進めなくなつてしまいます。日本の場合は聖徳太子の時代は考え方を変えるのに大事な時代だと思えます。聖徳太子の「事は独り断むべからず、必ず諸々と宜しく

あげつらうべし」は気をつかうことのきっかけと言ってよいでしょう。(ケニア)

この学生は「十七条の憲法」を単に知識として覚えたのではなく、母国の文化との比較から憲法の「事は独り断むべからず、諸々と宜しくあげつらうべし」という言葉に現代にも共通する「日本人の生き方」「考え方」をみいだそうとしているのがわかる。

### 3) 日本事情ゼミナール

日本事情ゼミナールは留学生、日本人、帰国生など様々な背景文化、国籍をもった学生で構成され、学生が主体となり、グループワーク、討論を行っているが、共同作業のプロセス、およびクラス内での討論はまさに「異文化接触」の場である。学生の取り上げるテーマは多岐にわたっているが、空気のように身近で無意識に感じている日常生活の事柄、出来事を「意識的」ととらえ直そうというテーマが多い。例えば、若者言葉、プライバシー、管理教育、教科書問題、いじめ、戦争責任、過労死、お酒、大学で出欠をとるべきか否か、テレビの暴力シーンはよいかわるいか、男女の友情は成立するか、等、社会システム、生き方、考え方に関連するものなど、様々である(徳井1996b, 1997b)。ここでは「若者言葉について」「身体について」をテーマに行ったものを例としてとりあげる。

#### ケース5 身体について—日常生活からの外在化と内在化—

テーマ 身体について(いれずみ、ピアス、茶髪、ダイエット、テレクラについて)

##### 1) 日常生活の再生(劇の導入)

まず、担当班は日常生活の中でのシーンを題材に劇を導入した。(劇はシナリオからすべて学生が作成している)(なお、このシーンは日本での日常生活を再現している。なお、ここに紹介するシナリオは一部である)なお、y, r, m は留学生、k, n は日本人学生である。

(学校の休み時間)

y ねえ、ねえ、あの人、かっこいいと思わない?

k どの人?

y あの人よ、あの人。あのピアスしている人。

m でも鼻にピアスしている人って息がしにくそうじゃない?

k でも、鼻のピアスっておしゃれじゃない?

r おしゃれだけど、痛そうじゃない?

あの人良さそう。

m えっどうして?

r 背が高いし、顔もいいし、スポーツもできそうだし……

n えっ、おれ、おれ、……おれって頭良いし、性格いいし、服だってもう完璧。

m えっ それもそうだけど、男ってやっぱり心だよな。

k でも、おしゃれだったらもっといいやん。

r うーん、でも、身体に傷つけてまでおしゃれすることないじゃない。

y どういうこと?身体に傷つける?あ、そうか。うーん、マレーシアでは全然そう考えていないですねえ。ねえねえ、rさん、中国はどう?

r 中国の場合はね、男はもしピアスつけていたら変だと思われるから、することはあまりないですよ。

m でも、友達の中にけっこうピアス似合う人はいますよ。どう思う?nさん。

n 俺はやはりになんか、流されないよ。俺みんながやっていることやりたくないもん。

## 2) 内在化, 外在化の共有の意義 (グループ討論・レポート集)

次に「身体を傷つけてまでおしゃれしたいかどうか。」についてのグループ討論を行った。

主な意見としては、「マレーシアでは小さい頃や結婚する前に(ピアスの穴を)開ける。来世も女性でありたいと言う願いから、亡くなった後にあける場合もある」「中国では個人の自由できめる。個人的には痛そうなのであまりあけたくない」「ケニアではピアスのためにあけた穴が大きいほど、美人だと思われる。」など、学生の背景文化によってかなり習慣が異なることがあげられた。多文化クラスは様々な背景文化の異なるメンバーで構成されているため、このようにクロス・カルチュラルな視点からの意見も多い。こういった様々な意見にふれることは、学生が日常の社会的現象を内在化させていく過程で一方向的な方向だけでなく、様々な方向に内在化させていくことを可能にさせるであろう。つまり、多文化クラスでの討論は複眼的な見解を提供し、様々な内在化の方向を可能にする。しかし、この段階では特に留学生の場合、「個人」としてよりも「文化の代表として意見を述べる」のにとどまっている。そこで、さらに身体に関するピアス以外に流行している「テレクラ」「茶髪」などに話題を広げ、「なぜはやっているのか」「これらはどんな生き方が反映されているのか」についてグループ討論を行った。討論では「現在、人間関係が薄くなってきているのが反映されているのではないか。」「日本の法律はあまり厳しくないが、そのためではないか。」などがあげられた。

授業中の討論では時間が限られているため、ゼミでは授業後に「レポート集」を発行し、意見の交換を行っている。ここではさらに学生が討論をもとに自分なりに内在化, 外在化させ、「個人」として意見をのべているものが多い。このように各自が内在化させた意見を共有していくことは重要であろう。

a (略) 現代では人間関係が希薄になってきている人たちが昔より増えたのではないだろうか。人と人との信頼関係があまりなく、そのような心の隙間を売春などの刺激でうめようとしているのではないかと思う。そのような彼女達もいずれは今の自分達のしていることが無意味でむなしいことだったと気づくのではないだろうか。テレクラや売春の刺激では心の隙間を埋めることなどできるはずはないであろうから。人と人とお互いに相手を深く理解し、深く受け入れ合うような人間関係のすばらしさを家庭や教育の現場で子ども達に理解させ、体得させることが大切だとぼくは思う。そのような人間関係のすばらしさを知っていれば、また自分自身に対する思いやりも当然していることだろう。そして自分自身を思いやり、大切にすることができれば、自分や自分自身の人生に対する責任感もでてくるだろう。そうすれば、性犯罪に走る若者などいなくなると思う。(日本人学生)

b 日本にくる前、私はテレクラをしらなかった。なぜかというと、私の国ではテレクラということはないからと思います。まず、今の若者は洋服や髪の色、化粧のことばかり考えていると思います。今の環境からみると、社会が発達すればするほど、家庭の親子の距離感が大きくなる。親は会社の仕事のために子どもとしゃべる時間が少なくなり、一緒に遊べないというすまない気持ちがあり、その心理があって金を子どもにあげてしまった。それで時間と金を持った若者は買いをしったり遊んだりする。(ベトナム人学生)

a はテレクラという社会現象から、人と人との信頼関係が薄くなっている現代日本人の生き

方へ内在化させていくことによってその原因を追求している。そして、「人と人とがお互いに相手を深く理解し、深く受け入れ合うような人間関係のすばらしさを家庭や教育の現場で子ども達に理解させ、体得させることが大切」という今後の「生き方」への示唆を述べている。bもテレクラや茶髪、ピアス、ダイエットなどの流行の社会的現象の原因を追求したものであるが、「親子の距離感が大きくなり」「お金を子どもにわたす」と、自分なりの分析方法で「日本人の生き方、考え方」へと内在化させている。外国人としての「眼」で客観的に日本人の生き方、考えかたに追求したものであるといえよう。

c 発表する前、私は身体を大事にしなければならないと言う意見が強かった。ずっと前からピアスすることは自分の身体を傷つけることであり、批判すべきだと思っていた。自分もその痛みに耐えられないため、ピアスをつけなかったのである。しかし、劇の中で私はピアスをつけようとしている女子高生の役を演じた。そして、彼女の立場にたってもう一度考え直した。彼女の立場から現代の若者の立場もみえてくるのではないかと思う。人間は誰でもきれいになりたい、きれいにみせたい気持ちがある。そのためにいろいろな努力をするわけである。特に若者が新しい風潮を受け入れやすいので、一番早くファッションやブームに流されるのである。彼女の場合、ただ自分が好きな恰好をしたいただけなのに、母親に反対された。それは私たちが気に入った服をきたり靴を買ったりすることと同じではないか。それが自分と似合う格好だと思えば、服装にしても髪色にしても自由に選択するべきだと思う。

身体を大事にしたいからこそ、きれいにみせたいからこそ、ピアスをつけたり、髪の毛を染めたり、ダイエットしたりするわけではないか。だから、もしアレルギーがなければピアスだって茶髪だっていいことではないか。ダイエットにしてもやりすぎでなければ魅力的で美しい体型になれるとしたらありがたいことではないか。また、ピアスをつけるのを一種の伝統文化としている民族もあるそうである。私達はその伝統文化を批判すべきなのか。また、そういうおしゃれな格好をしている人のことを世間の目はどういうふうに見ているかと考えておきたい。よくないイメージがあるではないか。まじめな人だったらきっとそういう格好をしないだろうと思う人はけっこういるようである。「外見より中身だ」という言葉があるが、ただ外見で人のよしあしを判断してはいけないと言うことである。もちろんテレクラや売春まではやってはいけないと思う。

発表して前とは違う側面から物事をみることができ、本当にいい勉強になったのでよかったと思う。(中国人学生)

ロールプレイの長所はこのように異なった視点からのものの見方を体験することができるという所にある。この学生は劇を演じることによってこれまでの自分自身とは逆の立場にたち、ピアスやダイエットという社会現象を「人間の生き方」「考え方」へと内在化させている。「身体を大事にしたいからこそ、きれいにみせたいからこそ、ピアスをつけたり、髪の毛を染めたり、ダイエットしたりするわけではないか。」という考え方は、おそらく劇を演じなければでてこないものであったろう。また、「ピアスをつけるのを一種の伝統文化としている民族もあるそうである。私達はその伝統文化を批判すべきなのか。」と、異なった習慣をもつ文化における「人間の生き方」「考え方」を受け入れ、「文化の多様性」に対する寛大さを示しているところもみられた。

多文化クラスでの討論、レポート集は「内在化」「外在化」の過程を共有することによってこの過程が一方向だけでなく、様々な方向性の可能性があることに気づいていくという意

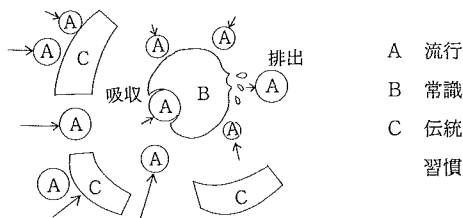
味で重要な意義をもつと考える。

### 3) 内在化, 外在化から新たな文化論へ

議論をもとに自分なりに内在化, 外在化させていく中で学生独自の「新たな文化論」をうだすレポートもみられた。

d ピアスなどは10年前前はそれほど話題や問題になるものではありませんでしたが, 最近とかく話題にのぼります。今では老若男女, 誰がつけても不思議でなくなりました。

こういったものにはまず, その地域, 国の常識があり, その外側に伝統や習慣があります。そこに流行, それは自然発生的なものから企業やメディアによる人為的なもの, あるいは異文化からの影響などから生み出されるもので, これが伝統や習慣に降り注ぎ, 選択されます。その壁を通り抜けたものが常識の中に吸収されたり, またはそれに蹴散らされたりするのです。図にすると次のようになります。



常識に吸収された流行は常識となり, そこから伝統や習慣, 文化などに変質してゆくのです。この図は社会全体にも, ひとりの個人にもあてはまるものだと思います。

私が一番感じることは最近, 伝統や習慣といった壁が個人個人の中で小さく, そして薄くなってきており, それ

に伴い常識というものが個人間, 世代間で大きく違ってきて常識があまりにも多様化しすぎてしまったのではないかということです。しかし現代にはその多様化した常識をすべてかかえこめるほど, 多種多様な社会環境が存在するため, すべては個人の自由に委ねられてしまうのではないのでしょうか。(日本人学生)

これは, ピアスなどの「流行」という社会現象を自分なりにそこに反映される人間の生き方, 価値観や社会システムへと内在化, 外在化させてゆく過程で, 「伝統」との関連からこの現象を新たな視点からモデル化し, 説明しようとしたものである。単なる内在化, 外在化だけでなく, それらを通して独自の視点で分析している。この学生はこの現象を日本という特定の文化に限らず culture general の立場から新たな文化論を展開させているが, このように「独自の視点をもった新たな文化論の構築」は「日本事情教育」のめざしているもののひとつであるといつてよいであろう。

## 5 終わりに

本稿では「日本事情教育」のための文化モデルの構築を試み, そのモデルをもとに外在化, 内在化という観点から「日本事情を学ぶとは何か」についてひとつの可能性をさぐってみた。

我々をとりまいている環境すなわち身近な日常生活の中で起きる様々な事象や事物(文化遺産, 芸術作品, 社会システム)に接し, その原因は何か, どのような生き方が反映されたものか, そしてそこにみられる考え(価値観, 信念)へと深層面へと追求していく Internalization と, 考え方(信念, 価値観など)から, その背景となる生き方, 環境, 日常生活へと表層面へと広げていく Externalization は日本事情を学んでいくために重要であると考

える。そして、学習者同士がそれぞれの方向性を共有していくことで、さらに様々な方向へと外在化、内在化させていく事も重要であると考え。さらに、この様々な過程を経て、学習者が独自の「文化論」を築きあげていくことは「日本事情教育」のめざしているものであるとあってよいだろう。

日本事情教育はその領域も意義もまだ混沌としている。しかし、すでに異文化間コミュニケーション等の関連分野で構築されたモデルをもとにモデルを模索する事は、日本事情教育を包括的にとらえる一つの手がかりをつくり、様々な領域と関わりをもっている日本事情がさらに様々な要素を含みつつ発展していくひとつのきっかけとなっていくという意味で重要な意味を持つのではないかと考える。今後モデルの修正等も必要かと思われる。拙稿についてご指摘ご意見いただければ幸いである。

## 注

- 1) 渡辺文夫は「私たちが異文化接触の問題をマクロのレベルでみようとするのか、ミクロのレベルでみようとするのか、あるいはその双方のダイナミックな関係をみようとするのか、によって、必要とされる文化の捉え方も異なってくるであろう。」と述べている。氏はさらに文化人類学的な見方による文化の捉え方についてはKeesing (1974) の分類を挙げ、1) システムとしての文化 2) 概念としての文化に分けられ、2) はさらに認識システムとしての文化、構造的システムとしての文化、象徴システムとしての文化に分類することができる、としている。また、心理学的に文化を捉えた場合、発達論的な見方、認知主義的な見方、行動主義的な見方がある、としている。
- 2) Bennett の述べる CULTURE, culture の分類は人類学者 Goodenough の「第一の文化」、「第二の文化」、心理学者 Osgood の「客体文化」「主体文化」に対応している。
- 3) 担当 後藤泰一教官
- 4) 担当 廣瀬健夫教官  
西岡晴彦教官

## 参考文献

- 砂川裕一 1995 「『日本事情』の複合的機能性」平成7年度日本語教育学会秋季大会
- 砂川裕一 1995 「第三領域としての『日本事情』」第8回日本語教育連絡会議報告集 アダム・ミツケビッチ大学
- 田中共子・秦喜美恵 1996 「日本文化理解のための教材構成の理論と試案：社会的文脈を伴う対話場面を中心に」世界の日本語教育 第6号 国際交流基金日本語国際センター
- 徳井厚子 1996a 「異文化理解と日本事情教育(一)―異文化接触における自己変容の気づきをとおして学ぶ―」信州大学教育学部紀要87号
- 同 1996b 「日本事情のイメージと役割―学生たちの眼をとおしてみえてくるもの―」信州大学教育システム開発センター 1号
- 同 1996c 「戦後五十年と日本事情教育」信州大学教育学部紀要 88号
- 同 1996d 「異文化理解と日本事情教育(二)誤解のプロセスを考える異文化トレーニングの試み」同38号
- 同 1997a 予定 「留学生に俳句を教える」 同90号
- 同 1997b 予定 「異文化理解教育としての日本事情の可能性―多文化クラスにおけるディベ



カッションの試みー」日本語教育92号

- 中西晃 1998「異文化理解と海外子女教育・帰国子女教育」『異文化間教育2』アカデミア出版会
- 長谷川恒雄, 佐々木倫子, 細川英雄, 砂川裕一 1994『外国人留学生のための「日本事情」のありかたについての基礎的調査・研究』総合研究A文部省科学研究補助金研究成果報告書
- 細川英雄 1994『実践日本事情入門』大修館
- 同 1995「ことば・文化・社会を学ぶー学習者主体の「日本事情」教育のあり方について」
- 水谷修他 1995『日本事情ハンドブック』大修館
- 渡辺文夫 1992「異文化教育の方法」『現代のエスプリ』299
- 渡辺文夫編 1995『異文化接触の心理学』川島書店
- Dodd, Carley, 1995, Dynamics of Intercultural Communication, Brown & Benchmark.
- Milton & Jannett Bennet, 1996, Contemporary Methods In Teaching English As A Foreign Language And Intercultural Communication, S.F.S.U